川崎市総合教育センター研究紀要10:221-224.1997

平成８年度

生徒を活かす学校教育相談

川崎市総合教育センター　カウンセラー研修

生徒を生かす
学校教育相談

松澤　吉雄[1]

はじめに

生徒指導担当教員としての任に当たり3年が過ぎようとしている。その間、多くの問題をもつ生徒達と実際に関わりを持ったり、各種の研修会に参加し生徒との関わり方について学んだ。そして、目の前に起きている生徒達のいろいろな問題に対応していくだけでは、根本的な問題の解決には至らないのでは、と言う疑問を持つようになった。

このような疑問を感じているときに、川崎市総合教育センターのカウンセラー研修員として、教育相談の研修の機会を与えていただいた。そして、この機会に自分自身の教育活動を見直し、学校教育相談の方向性を見つけ出せればと考えた。それを以下に述べてみたい。

I　主題設定の理由

生徒指導の今日的な課題として『人間関係の希薄』がとりあげられて久しい。生徒と教師はもちろんのこと、生徒相互についても同じ事が言えるのではないかと考える。生徒の特質についての各種の調査からも次の点が指摘されている。

「親しい友人はいるが内面的に浅い付き合いで、心の中では何でも話し合える親友を求めている」

つまり、『孤独な生徒』が増加していると言うことになる。したがって、生徒に望ましい人間関係とは何かを考えさせていくことが、重要な課題になるのではないだろうか。

また、情報化・国際化など多様に変化する社会の中で、生徒達も様変わりしてきている。生徒達は疑似体験・間接体験ばかりの知的情報によって大きな影響を受けている。したがって、いざ問題に直面したとき、どのような行動が適切であるか自分自身で判断し、実行する力が身につくような援助が必要になってくるのではないだろうか。

さて、中学校において生徒は自我に目覚め、自分の存在を考え始める。学校や家庭で『自分が認められていない』『自分は必要ないのでは』と感じた時には、何らかの反応を示すのではないだろうか。学校生活の中では非行・不登校・いじめ等の形となって表れることもあるであろうし、家庭生活においては、閉じこもり・家庭内暴力といった形となって表れることもあると考えられる。

生徒の考え方や行動が多様化し、今までの問題解決だけを目的とした関わり方では、対応仕切れないのが現状である。学校で行われる指導も通らず、家庭での指導も通らない生徒達とどのように接していけば問題解決がなされるのか。不登校の生徒とどのように関わっていけば良いのか。家庭での居場所のない生徒達をどう支えていけば良いのか等、自分自身のこれまで行って来た相談活動が、生徒にとって良い関わり方だったのか、もっと良い関わり方もあったのではと、もう一度見直さなければいけない時期と考えている。

生徒に対する教育相談は、『生徒のありのままの姿を分かろうとし、精神的な成長を見守る』と言うことであると自分ではとらえている。

したがって、教師が生徒一人一人の気持ちを分かりたいと思うことが、重要になることは言うまでもない。生徒の気持ちを理解しようとするならば、今までのように教師から生徒への、一方的な指導・指示だけの関わりではなく、生徒と同じ視点に立つことの必要性を感じる。また、教師という殻を脱ぎ捨てて、一人の人間として関わっていきたい。

生徒がやってくるのを待っている時代から、教師自らが先に動き出し、生徒に寄り添っていく時代に変わって来たのだと感じる。教師が前向きに生徒を理解しようと努力することによって、生徒も心を開いてくれるのであろう。これが今日の学校に望まれている事であり、教育相談の原点なのではないか。

しかし、学校現場においては、教育相談の意味・重要性が理解されていないため、うまく機能していない場面もある。教育相談は難しい事と考えられたり、また、『甘やかしだ』『一部の生徒に対しては有効だが、生徒指導の問題を解決していくためには効果がない』という考えもある。そして、我々教師にも時間的な余裕がなく、ゆったりと生徒に関わったり、思うように研修等にも参加できない現状も見逃せない。

そこで、今回の当センターでの研修を機会に、自分自身の学校での生徒との関わり方を見つめ直すと共に、改めて教育相談の意義を学び、今後の相談活動を充実させていきたいと考えた。さらに、様々な機会を利用し、研修を通して学んだこと考えたことを学校で実践していくことにより、学校の中で、教育相談に対する理解を深めていくことができればと考えている。それが、生徒と教師あるいは生徒相互の望ましい人間関係を作ることに役立つであろし、生徒の成長を温かく見守り、生徒が生き生きと活動できる学校作りにもつながるのではないだろうかと考え、このテーマを設定した。

---

[1]川崎市立向丘中学校（カウンセラー研修員）

Ⅱ　研究の方法

1．　受理会議に参加し、インテークの方法を知り、子供に対する多角的な見方を学ぶ。
2．　事例会議に参加し、教育相談の技法や進め方、問題解決に向けての考え方を学ぶ。
3．　教育相談基礎研修と教育相談実習研修に参加して、教育相談の意義や技法について学ぶ。
4．　文献や資料を通して、現在の学校教育相談の現状を知り、学校教育相談の意義について学ぶ。
5．　カウンセラーとして実際の相談ケースを持ち、教育相談の実際を体験することにより、学校での生徒への接し方について学ぶ。

Ⅲ　研究内容と結果の考察

1．受理会議・事例会議を通して

当センターでは週１回の受理会議と、月１回の事例会議が定期的に行われている。その受理会議のインテーク報告の中では、家族構成や当日の服装・眼・表情など、学校現場では考えられないほどの多角的な観察と、来談者に対する受け入れ方や相談を大切にすることなどのきめ細やかさにまず驚かされた。

また、いろいろな感想や意見の交換がなされることで、来談者の気持ちへの理解が深まり、今後の相談の方向性が考えられてくる。私では気にもしないであろう来談者の表情・目線等から読み取られる相手の心理。何が原因かを捜し出そうとする真剣な討議。ドクター等による的確なアドバイス等、実に見事としか言いようのない会議である。

インテーク報告の中で、『学校は信じていない』『学校は何もしてくれない』等の、相談者の言葉を耳にすると、憤りを感じると共に、教師は真剣に生徒と関わっているのだろうか、保護者の相談に乗っているのだろうかと、疑問を抱かざるをえなくなってしまうことが度度あった。教師がもう少し生徒の気持ちを知りたいと考えて行動し、関わりをもっていれば生徒や保護者がこんなに悩み苦しまずにすんだのではないか。本当にこんな指導が行われているのかと、疑問に思う事例を突き付けられたこともあった。

このように、心を支えるセンターでの相談活動と同様に、学校においても、生徒を援助し、保護者を支えられるような教育相談が常に行われ、問題行動に対する指導がなされることが望ましい。しかし、現実には生徒の本当の気持ちも分からないまま、教師の指導が一方的に行われる例もあるのではないだろうか。

学校の相談においては、問題がなにかを聞き、それが良いことなのか悪いことなのかがどうしても気になってしまう。子供のために来校して来た保護者の気持ちはどんなであろうか。生徒の本当の気持ちはどんなであろうか。そこまで考えずに行った面談も数多くあるように思われ、今思うと恥ずかしくなってしまう。

問題行動の背景には、それと同じ大きさの心の問題や悩みがあると考えられ、心と体のバランスを取るために問題行動が起きていると考えられる。つまり、問題行動は生徒の心の問題の氷山の一角に過ぎず、問題行動だけを取り除こうとしても、心と体のバランスを崩すだけで、また違う形の問題行動が起きるのではないだろうか。この心と体のバランスが取れるようになるためには、精神的な成長が必要であり、精神的な成長をいかに援助できるかということが、学校での教育相談なのではないだろうか。そのためには、生徒の行動・言動はどのような気持ちから出てきているのか、深く観察しなければならないし、生徒と同じ視点に立ち、生徒を分かろうとする心構えが必要になってくる。

現在の生徒の特徴として、『人と接することを避けたがり、責任を回避する傾向がある。また、ものごとを短絡的に捕らえることが多い』等があげられている。

しかし、心の中で悩みを抱えていても、うまく伝えることができず、一人で苦しみ解決の糸口も見つからず、不安がつのる。その不安を解消するために、別の行動を取っていると言うことも考えられる。

そういう生徒に対するときこそ、生徒の気持ちを考えて指導するからこそ、生徒の心の中に変化が起き、問題や悩みの解決に向けて、自ら動き出そうとするのであろう。

『いけない事はいけない』ときちんと言える毅然とした態度と、『生徒の気持ちを分かりたい』という共感的な態度で生徒を援助しようとするならば、教師と生徒の間に信頼関係が生まれてくるはずである。

教師が生徒の話をよく聞くことによって生徒の心を和らげ、自分の悩みを聞いてもらいたいと言う気持にさせる。そして、生徒の心にも人の話を聞く姿勢が作られると共に、勇気づけられ、自らが問題を解決しようと動き始めるのではないだろうか。

また、教師が生徒の話を生徒の立場に立って聞くためには、『生徒を肯定的に見ながら、行動を共にし触れ合う時間をより多く取る。生徒の送る小さなサインを敏感にキャッチする感性を持ち、教師の価値観、道徳観だけで生徒の話を判断しない。』等の姿勢が必要となるであろう。

生徒は温かい人間関係の中で、本当の自分の姿を見つけ出し、自分のあるべき姿を考えられるようになると言うことも忘れてはならない。

2．基礎・実技研修及び文献等を通して

学校教育そのものが生徒を理解することから始まるのは言うまでもないが、教育相談や生徒指導の原点もまた生徒の理解に尽きる。

その生徒の理解には、学力・知能・健康状態・家庭環境・性格・友人関係等の客観的理解と、生徒の内面を分かろうとする共感的理解とがあげられる。前者は資料を整えればどの教師にも理解することができるが、後者は教師それぞれの関わり方によって、理解の深さが違ってくる。そう簡単に生徒が心を開いてくれる訳でもないだろうし、生徒のありのままの姿に触れるのは難しい事である。

しかし、現在教師には生徒の内面まで理解していくという努力が望まれている。

では、どのようにすれば生徒の内面を理解していくことができるのであろうか。それは『普段の学校生活の中でより多くの時間を生徒と共に過ごす事』であろう。

クラスや相談室、廊下などで生徒と他愛もない会話を交わしたり、昼休みなど一緒に遊ぶことで生徒は心を開きだし、真の自分の姿を見せるものである。教師も自分の生い立ち・生活体験などを何げなく語ることで、生徒は教師の価値観・人生観を理解し、信頼関係ができてくるのではないだろうか。教師にとって、この毎日の積み重ねが生徒理解に最も大切なことであり、生徒指導的な問題が起こったときに、普段からどのくらい問題をもつ生徒と関わっていたか、その生徒の内面をどのくらい分かっているかがものを言うのではないだろうか。

このように、相談活動を円滑に行っていくためには、教師が生徒を分かろうとすることに努め、信頼関係を築く事が大切である。

次に教師と生徒の関わり方について考えてみたい。普段の学校生活の中で、目立つ生徒や、生徒自ら教師に声をかけてくる生徒とは関わる時間も多いが、おとなしい生徒とは関わる時間が少ないのが私自身の現状である。しかし、何も問題や悩みを持たない生徒など、中学校では存在しないであろう。そういう意味で、学校での教育相談は、すべての教師が、すべての学校生活の場で、すべての生徒に対し行われるべきものであるのは言うまでもない。

また、教育相談の理想的な流れを考えてみると、

①普段の雑談　　②問題の発見

③相談　　④継続相談

があげられるが、それぞれの場合についてまとめてみたい。

①普段の雑談

生徒の気持ちを分かりたいと教師が常に思っていることがまず大切なのではないだろうか。学校で生徒と関わる時間を多くしていくことが必要であろう。そのためには、休み時間は相談室や廊下、空き時間は自分のクラスを巡回してみる。放課後は部活動等で生徒と共に汗をかく等、生徒の本当の姿が見えやすい場所に行く事が大切である。生徒との雑談をしていく中で、思わぬ生徒の一面を知ることができるであろうし、教師も生徒と本音で話をすることで、生徒に教師の意向が分かってもらえるのではないだろうか。お互いの気持ちを分かりあえることで信頼関係が生まれ、生徒の抱える悩みが、だんだんと見えてくるのであろう。教師のちょっとした時間の使い方で、生徒の気持ちを知ることができそうである。

②問題の発見

問題発見とは、生徒の行動・言動・表情・雰囲気などから、悩みのあることに気づく姿勢である。そのためには、教師と生徒の、心と心のつながった関係が必要になってくるのではないだろうか。

また、クラス全体だけを見ないで、生徒を一人一人の個人として尊重していくことが大切である。しかし、多くの生徒の内面的な悩みを全て見つけだすことは、不可能に近いのも事実であろう。だからこそ教師は、生徒が『相談してみよう』と思うような信頼関係を作るよう努めなければならない。

③相談

生徒と教師の信頼関係が築かれていることは非常に大切である。生徒が教師を信頼していれば『ちゃんとやってみよう』と思うだろうし、尊敬していれば『先生のようになりたい』『この人が言うのだから信頼できる』と思うことであろう。

教師の価値観・道徳観だけで判断せず、生徒の気持ちに立って一緒に考え、生徒の精神的な成長を援助して行くことが大切なように思われる。時には父親や親分のように、時には母親や恋人のように、また兄弟のようにいろいろなふれあいや援助の仕方が生徒の個性に合わせてできれば良いのではないだろうか。

④継続相談

生徒が精神的に成長するのには時間がかかるものであり、精神的に成長することで生徒は自分の力で必ず問題の解決に向かうと考えられる。しかし、教師が問題の解決を焦るばかりに、精神的な成長を妨げることもあるのではないだろうか。生徒の力を信じ、見守ることが大切である。

当センターで、悩みを持つ生徒と継続的に関わるという貴重な体験をすることができた。相談を続けていく中で、生徒の内面に触れることもできるだろうし、抱えている悩みの大きさもより理解できるのであろう。そのためには、教師が生徒と継続的に相談するための力量を養いたい。

3．実際の相談ケースを通して

当センターにおいては１０月より相談の担当として十数回のカウンセリングを行ってきた。相談のケースとしては、不登校の中学校３年生男子Ａ君である。インテーク面接のときには私自身も緊張していたが、Ａ君もかなり緊張していたようである。何回かの面接が進んでいくと、お互いの緊張もほぐれ、楽しく時間が過ぎていくようになった。しかし、私自身の中には、Ａ君が中学校３年生でもあるし進路についての考えを何とか聞き出したく、その気持ちが言葉の所々で見え隠れしていたようである。そんなときＡ君の顔付きは、緊張でこわばってしまうようであった。

Ａ君が自分で問題を１つ１つ乗り越えないことには、何も先には進まないということは、頭では理解しているが、現実にはなかなか難しいことを痛感させられた。こちら側が引っ張るのではなく、Ａ君の力を信じ支えたいという気持ちがＡ君の心を開かせ、自ら問題の解決に進むことになるのではないだろうか。

学校現場においても、同じようなことが言えるのではないだろうか。Ａ君と同じような不登校の生徒は少なくない。学校に行けとけしかけても、登校できるものではないだろうし、もっと自分自身の中に閉じこもってしまうことさえ考えられる。

また、登校できなくなる前に、何らかの信号を教師や親に発してくる。これらの信号を発してくる生徒達は、言葉にならない何かを訴えようと必死のはずである。

学校を休むことは、とんでもない悪いことと決めつけてしまっては、生徒の思いを受け止められず、ただ心を傷つけているだけになってしまう。

また、教師の不用意な言葉や行動によって不登校を深める例もあるのではないだろうか。『あまり休んでいるとクラスのみんなも忘れてしまう』『このままでは進級や卒業ができない』等、脅かしと受け取れるような言葉を発しないよう心掛けたいものである。

このように悩んでいる生徒達に、苦しい思いをさせないためにも、「クラス全員がそろうことが大切」と生徒に訴えるのではなく、『君が必要だ』と言う思いを持って、一人一人の生徒と接することが大切なのではないだろうか。

不登校の生徒は言葉で表現することが苦手であることも多いように思える。だからこそ、普段から生徒の気持ちの理解を深めたいと考え、生徒のちょっとした変化に気づくことができるよう心掛けてなくてはならない。そのためにも、教師自身が教育相談の意味を理解し、学ぶ必要があると考える。そして、生徒の心の痛みを感じ取れる感受性、生徒が自分から動き出せるまで待てるゆとり、常に気にかけられる優しさが必要なのである。

Ⅳ　まとめと今後の課題

自分なりの考えを自分自身に照らし合わせながら色々考えて来たが、それは多くの教師によって実践されている事ではないだろうか。

朝から晩まで相談室等に常駐してくれている教師。毎朝校門で生徒と挨拶を交わし、その日の状態を見守っていてくれる教師。昼休みには、生徒と一緒になって汗を流し遊んでいる教師等。

だがそれが、全ての教師の共通理解の下に行われていないことと、今一歩踏み込んだ教育相談が全教師によって行われていないのも現実ではないだろうか。話を聞いているだけの教育相談では『甘い指導』となるのは言うまでもなく、やりたいようにやらせることが『生徒の自主性』でもないであろう。楽しく過ごせることが、学校教育の前提ではあるが、中学生の発達課題として『自主性を育てる』ことも忘れてはならない。『いけないことだが皆やっている』しかし『僕はこれをやらない』と言った主体性を中学校で身につけさせていきたいものである。生徒と教師の心と心のつながりから、やりたくないことや困難なことでも、『やるべきことはやる』と言った自主性を育てるために、安易な行動を教師が押し戻し、生徒自ら問題を発見し改善できるような関係を作っていければと考える。

今後さらに研修を深め、生徒一人一人の個性を大切にしながら、共に支え合い歩んでいくことを今後の課題としていきたい。

おわりに

１年間のカウンセラー研修を終わるに当たって、自分の中で何か違うものが流れ出したことを実感しているところです。このセンターでの経験を生かし、今後の教育活動を行っていきたいと思っております。

最後になりましたが、研修の機会を与えていただいたことを感謝するとともに、ご指導いただいた室長・指導主事・相談員の皆様に心よりお礼申し上げます。

・参考文献

金子　　保　『担任が行う生徒指導・教育相談』
日本文化科学社　1984年
十束　文男　『生徒理解とカウンセリング』
文教書院　1986年
國分　康孝　『学校カウンセリングの基本問題』
誠信書房　1987年
真仁田　昭　『学校カウンセリング』
金子書房　1990年

・指導助言

川崎市総合教育センター研修指導主事　中嶋　はるみ